近藤善弘画集

The Yoshihiro's Sketchbook

墓地雙林寺山門と西行庵

不思議な体験

三年前の正月、ふるさと京都に帰省した際に、久しぶりに小学校時代の担任だった生谷先生を訪ねた。私は、あまり学校の先生にかわいがられた経験がないが、この先生にはかわいがっていただいた。二十三年前に私が結婚したときに、仲人をお願いしたが、口べただからといって固辞された。シャイな方だった。もう七十歳を越しておられるが、六十歳から絵画を描き始めたとのこと。先生が描いたたくさんの絵を見せていただき、そのうちの一枚、日本アルプスの山々を描いた絵をいただいた。その絵は、東京の自宅に持ち帰り、額に入れて居間のピアノの上に飾ってあるが、我が家の宝物となった。

その年のゴールデンウイークの休日、日々の仕事からもやや解放されて、のんびりした気分で先生からいただいた絵を眺めていたら、なんとなく自分でも描いてみたい気持ちになった。思い返せば、子供の頃は、絵を描くのが好きで、鉄腕アトム、戦艦大和やゼロ戦などをよく描いたのに、なぜか、中学校に上ってからまったくやらなくなっていた。忘れかけていた懐かしい歌を久しぶりに聴いて胸がキュンとなった気分で、思い立って、お茶の水の画材屋へ出かけて、水彩絵具とスケッチブックを買ってしまった。

初めて描いたのは、自宅の机の上にたまたまあったパソコンのマウスだった。その次は、たしか、自分のめがね。今思えば、なんと面白みのないモチーフなことか。ともかく、身近な物や近所の景色を描き散らかしていた。ところで、その頃、女房が近所の太極拳教室に通っていたが、そこでご一緒している方のご主人が絵描きさんであった。女房がその方に私のことを話したところ、そのご主人が絵を教えて下さるという。近くに住んでいる義母も絵を描くことが好きで、土曜日の夜に一緒に習うこととなった。中年男とおばあさんだけが生徒という奇妙な「お絵描き教室」が始まった。

一昨年、三重県に赴任してからも、休日には近くの絵画教室に通いながら、時々絵を描いている。単身赴任のささやかな楽しみだ。子供たちが小さな頃の写真、我が家のバカだけれどかわいい犬、飲み干したワインのボトル、故郷の鴨川の流れ、写真で見た水車小屋……その時々で自分が描きたいと思ったものを気の向くままに描いている。

絵を描く上で大切なことは、対象をよく見ることだと絵の先生から教わった。物の陰の部分でもただ黒っぽいのではなくて、いろいろな美しい色が感じられる。海はブルーばかりではなくて、空や雲や太陽の色が水面に映り、また水底の砂も透けて見える。遠くの

山は、空気中に水蒸気があるから茶色ではなく青っぽく見える。「太陽は赤い」などという既成概念を離れて、自分の目でよく見ることが大切だ。

実は、わたしは、赤緑色弱で、子供の頃から、いろいろな点々の色で表現した数字などが読めなかった。小学生の頃から、なぜ他人が分かることが自分では見えないのか、情けない気持ちにもなった。 そういうことで、少し大きくなってからは、美術などというものは、自分とは縁がないものと思ってきた。事実、山が秋に紅葉するということに気づいたりすることもほとんどなかった。ところが、絵を描くようになってから、新緑の頃の山山のきれいな黄緑色を感ずることができるようになったし、秋の紅葉の燃え上がるような美しさにも感動できるようになった。自分の視神経に変化が生じたのかとも思ったが、そうではなくて、対象を見ること、感じることに努めると、ほんとうに見ること、感じることができるようになったのだと思う。

相変わらず、あるものを示されて何色かと問われると答えられないことが多い。しかし、色彩的に美しいものを美しいと感じられるようになったのは事実であり、自分でも不思議な感じがしている。結局、人は見る意思がなければ何も見ることができないし、感じようとしなければ何も感じることができないのかもしれない。 そのことが分かったことが、絵を描くようになって最もよかったことだと思っている。きっかけは、結局は、小学校の恩師に触発されたからであり、また、先生に一つ恩義に感ずることができたような気がしている。よい絵が描けたら先生に見てもらいたいが、なかなかそういうのが描けない。

「心の扉～私の体験記～」（三重県警月刊誌「あさあけ」2001年3月に掲載）

絵を数えて下さるという。近くに住んでいる義母も絵を描くことが好きで、土曜日の夜に一緒に習うこととなった。中年男とおばあさんだが生徒という奇妙な「お絵描き教室」が始まった。

一昨年、三重県に赴任しながらも、休日には近くの絵画教室に通いながら、時々絵を描いている。毎日赴任のさるやかな楽しみは、子供たちが小さな頃の写真、教が家のパイプのボトル、故郷の鳴川の流れ、写真で見た水車小屋――その時々で自分が描きたいと思ったものを気の向くままに描いている。

絵を描く上で大切なことは、対象をよく見ることだと絵の先生から教わった。物の陰の部分でもただ黒っぽいのではなくて、いろいろな美しい色が感じられる。海はブルーばかりではなくて、空や雲や太陽の色が水面に映り、また水底の砂も透けて見える。遠くの山は、空気中に水蒸気があるから茶色ではなく青っぽく見える。「太陽は赤い」などという既成概念を離れて、自分の目でよく見ることが大切だ。

実は、わたしは、赤緑色弱で、子供の頃から、いろいろな点々の色で表現した数字などが読めなかった。小学生の頃から、なぜ他人が分かることが自分では見えないのか、情けない気持ちにもなった。そういうことで、少し大きくなってからは、美術などというものは、自分とは縁がないものと思ってきた。事実、山が秋に紅葉するということに気づいたりすることもほとんどなかった。ところが、絵を描くようになってから、新緑の山山のきれいな黄緑色を感ずることができるようになったし、秋の紅葉の燃え上がるような美しさにも感動できるようになった。自分の視神経に変化が生じたのかとも思ったが、そうではなくて、対象を見ること、感じることに努めると、ほんとうに見ること、感じることができるようになったのだと思う。

相変わらず、あるものを示されて何色かと問われると答えられないことが多い。しかし、色彩的に美しいものを美しいと感じられるようになったのは事実であり、自分でも不思議な感じがしている。結局、人は見る意思がなければ何も見ることができないし、感じようとしなければ何も感じることができないのかもしれない。そのことが分かったことが、絵を描くようになって最もよかったことだと思っている。きっかけは、結局は、小学校の恩師に触発されたからであり、また、先生に一つ恩義に感ずることができたような気がしている。よい絵が描けたら先生に見てもらいたいが、なかなかそういうのが描けない。

37

心の扉～私の体験記～

不思議な体験

三重県警本部長
近藤善弘

三十年前の正月、ふるさと亀山に帰省した際に、久しぶりに小学校時代の担任だった生谷先生を訪ねた。私は、あまり学校の先生にはかわいがられた経験がないが、この先生にはかわいがっていただいた。二十三年前に私が結婚したときに、仲人をお願いしたが、口べただからといって固辞された。シャイな方だった。もう七十歳を越しておられるが、六十歳から絵画を描き始めたとのこと。先生が描いたたくさんの絵を見せていただき、そのうちの一枚、日本アルプスの山々を描いた絵をいただいた。その絵は、家宝の絵を額に入れて部屋のピアノの上に飾ってあるが、我が家の宝物となった。

その年のゴールデンウイークの休日、日々の仕事からも解放されて、のんびりした気分で先生からいただいた絵を眺めていたら、なんとなく自分でも描いてみたい気持ちになった。思い立せば、早速、太和ケ岳の頂上に登り、眺望を描いたのが始まり。中学校以上ではまったくやらなくなっていた。忘れかけていた懐かしい絵を久しぶりに眺めて胸がキュンとなった気分で、思い立って、お茶の水の画材屋へ出かけて、水彩絵具とスケッチブックを買ってしまった。

初めて描いたのは、自宅の机の上にあったパソコンのマウスだった。その次は、たしか、自分のめがね、今思えば、なんと面倒のないモチーフなこと。ともかく、身近な物や近所の景色を描き散らかしていた。ところで、その頃、友岸が近所の太極拳教室に通っていたが、そこでご一緒している方のご主人が絵描きさんであった。友岸がその方に私のことを話したところ、その方が私に絵を教えて下さるという。近くに住んでいる義母も絵を描くことが好きで、土曜日の夜に一緒に習うこととなった。中年男とおばあさんだが生徒という奇妙な「お絵描き教室」が始まった。

一昨年、三重県に赴任しながらも、休日には近くの絵画教室に通いながら、時々絵を描いている。毎日赴任のさるやかな楽しみは、子供たちが小さな頃の写真、教が家のパイプのボトル、故郷の鳴川の流れ、写真で見た水車小屋――その時々で自分が描きたいと思ったものを気の向くままに描いている。

絵画教室（坂本泰漣画伯に師事）で初めて描いた絵

プールに浮かぶ女性、描きたかったのは
ユラユラ揺れるプール底の模様

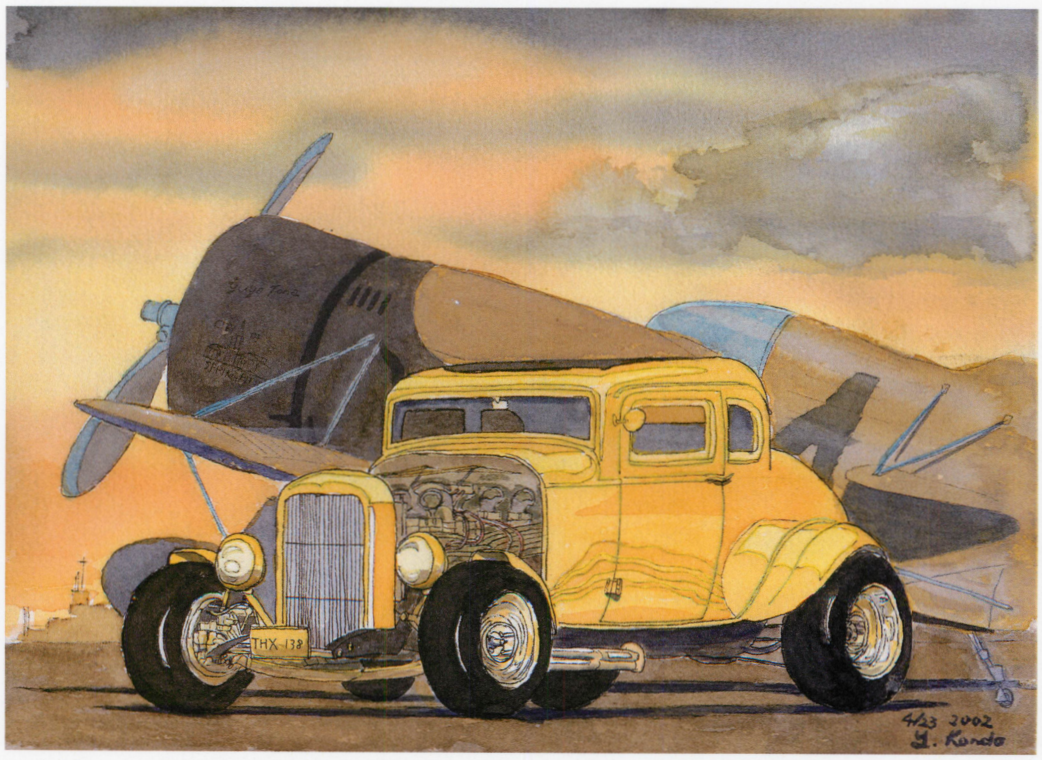
写真を見て描いたアクリル画、油絵のように描こうと考えた

安乗崎灯台（伊勢志摩国立公園）、「喜びも悲しみも幾歳月」の映画の舞台

沖縄の海を夕日に向かって進むヨット

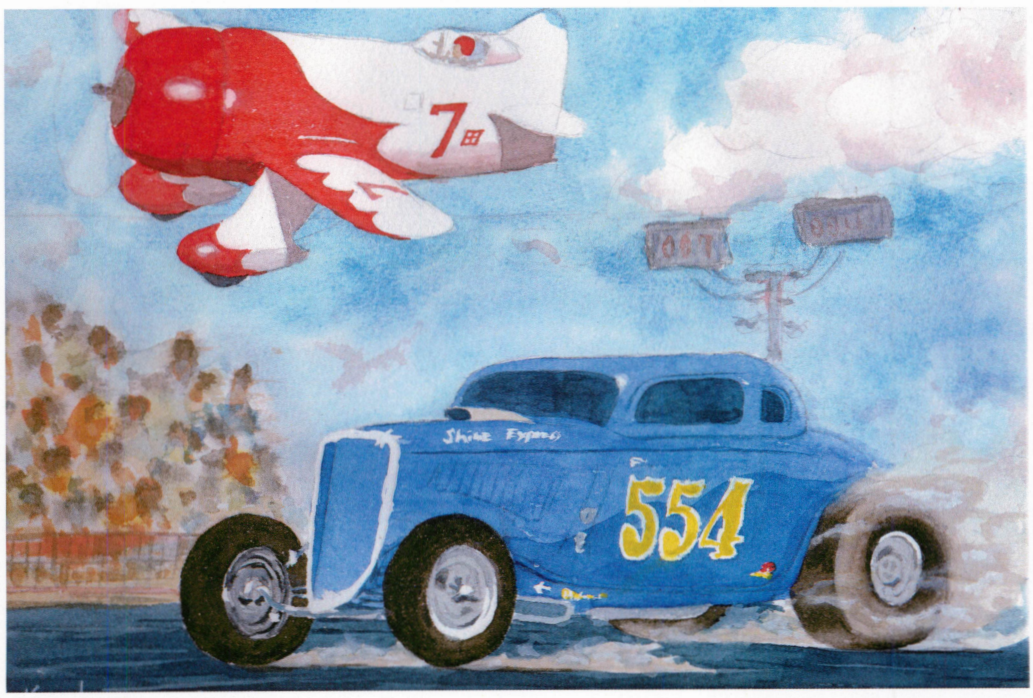
岡山県総社市国分寺、手前の草原にレンゲが一面に咲いてじゅうたんのように

睡蓮の花弁に梅雨の雨つゆが水滴となって玉のように美しく輝いている



映画「アメリカングラフィティー」に登場する黄色い'34フォードクーペ

写真を見て描いたオーロラ、木の影をやや鮮やかに描きすぎた

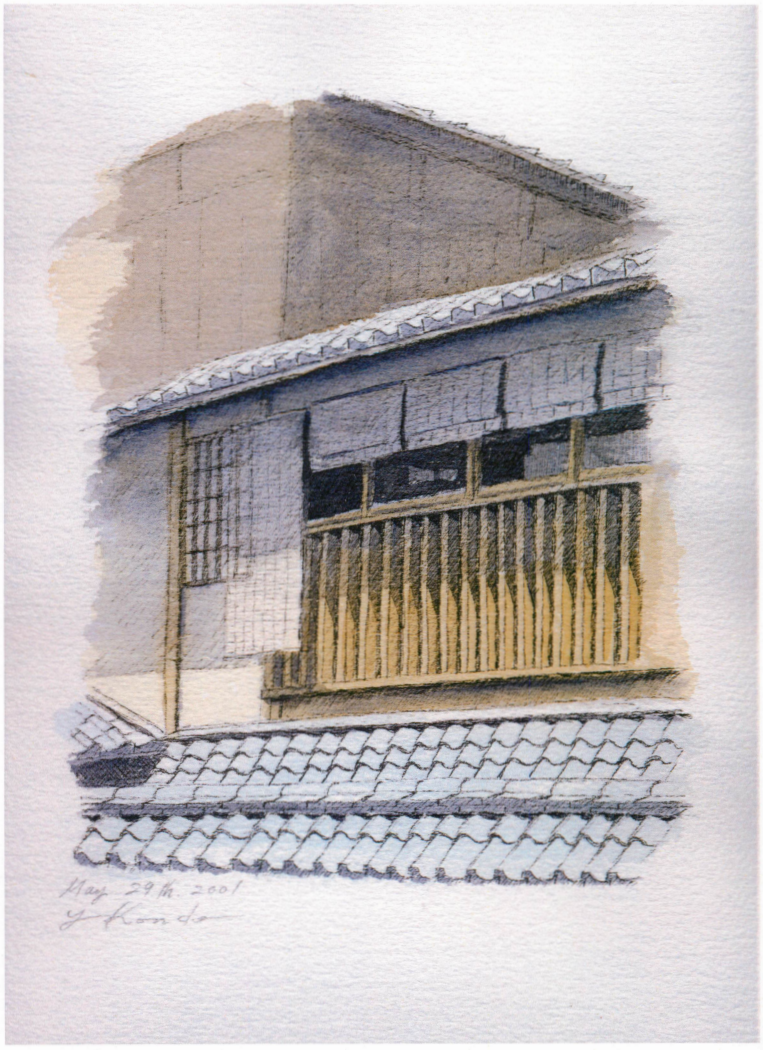


飛行機とスピード競争をする '34 フォードクーペの勇姿

京都の風景

盛夏の祇園。影のコントラストが強く、建物の陰には湿気がよどんでいる

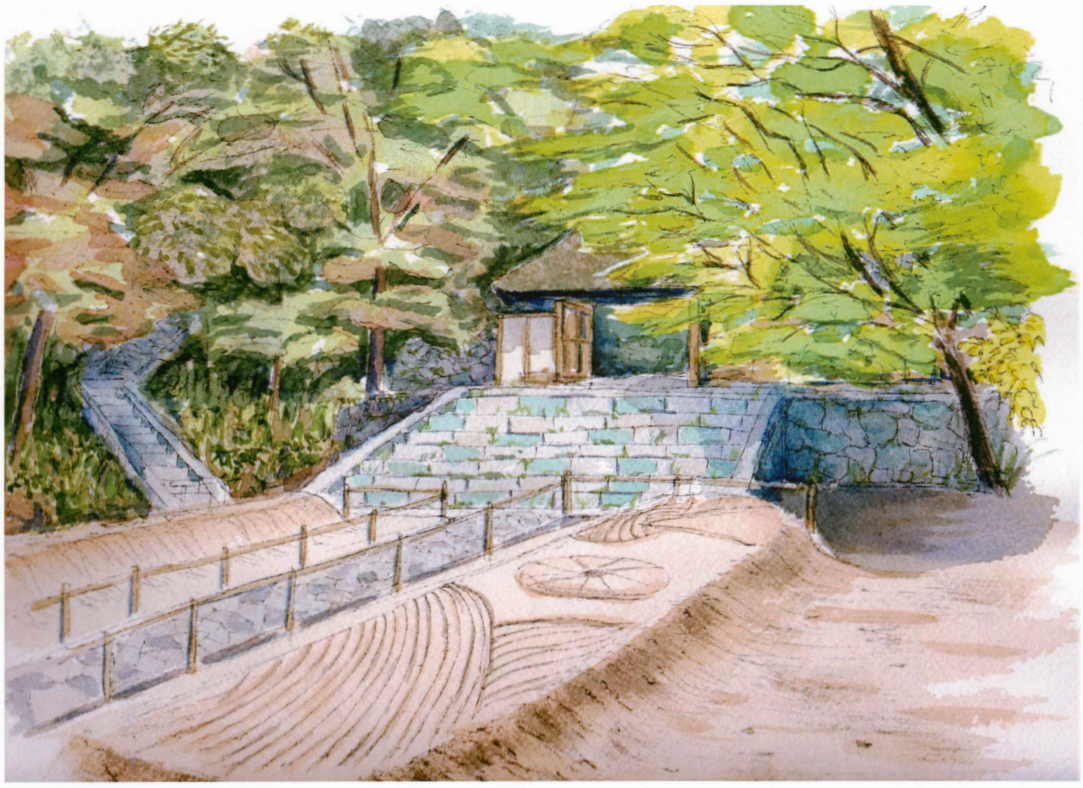
岡崎の疎水。桜を描くのは難しい、綿菓子のようになってしまうから



祇園の町屋。季節は夏、ガラス窓の映り込みを一生懸命描いた

自宅裏の賀茂川、空の雲が水面に映っている。小さな人物は幼いころの長男裕介と二男陽介で、大人は亡父、その３人を私が葵橋の上から見つめている

下鴨神社の泉川が紅葉で美しい。もみじの間から強い木漏れ陽が差し込んでいる



新緑の法然院。山門を入ると左右に白い砂が盛ってあり、それが美しい

自宅近くの下鴨神社（世界遺産）内の泉川の紅葉

南禅寺三門の紅葉。古い三門の下にはやや重くどっしりとした空気がよどんでいる

白川巽橋たもとにあるお好み焼き屋「たんと」。雪の白さは塗り残しによるもの

東福寺の庭。もみじよりもむしろ障子の裏面の描き方を考えた

屋根に雪をいただく金閣寺、明け方に雪は止み冬の空は青く美しく
晴れ上がっている。静かな水面に金閣寺の柱がくっきり映っている

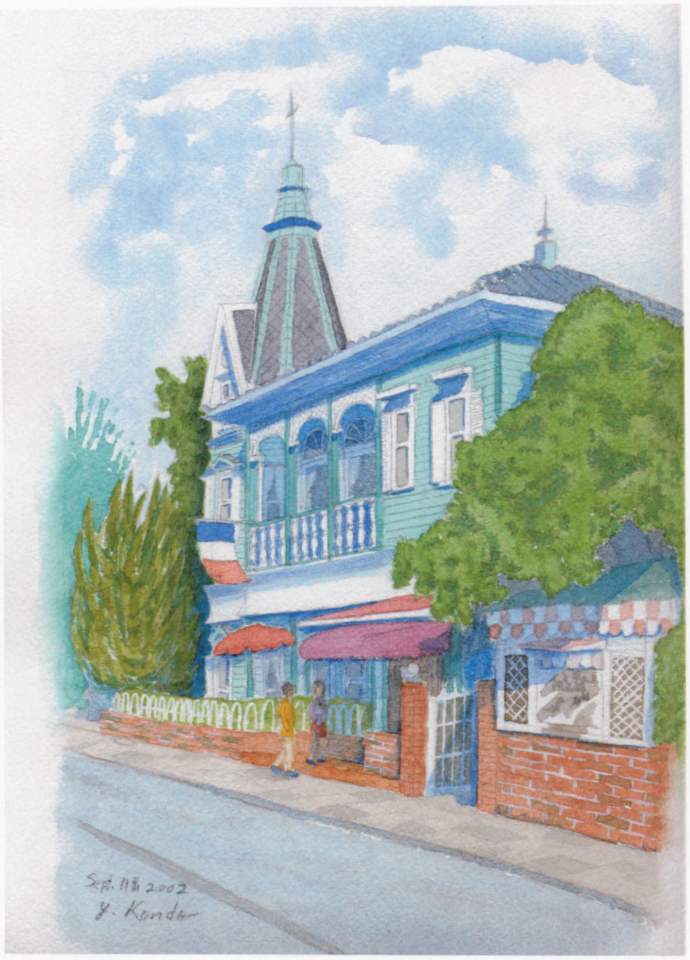
神奈川の風景

「横浜市開港記念会館」。1917 年完成のレトロ感覚にあふれる花崗岩の美しさ

横浜外人墓地入口。青葉の繁った大木が立派で描きたくなった、マリンタワーも

「横浜市イギリス館」前の噴水。落下する水滴の輝きは塗り残しによる

「港の見える丘公園」のバラ園に咲きほこるバラ、その大きさにも驚かされる



「山手十番館」外人墓地向かいにあるレストラン

デザートとしてワゴンのケーキが食べ放題

塔の一枚のガラスに朝の光がすごく反射して輝いている

1910 年「外交官内田定槌氏の邸宅」アメリカ人 J.M. ガーディナーの設計

「山手234番館」関東大震災の後に建てられた外国人向け復興住宅

明治9年「横浜山手テニス発祥記念館」イギリスからテニス伝わる、コート2面あり

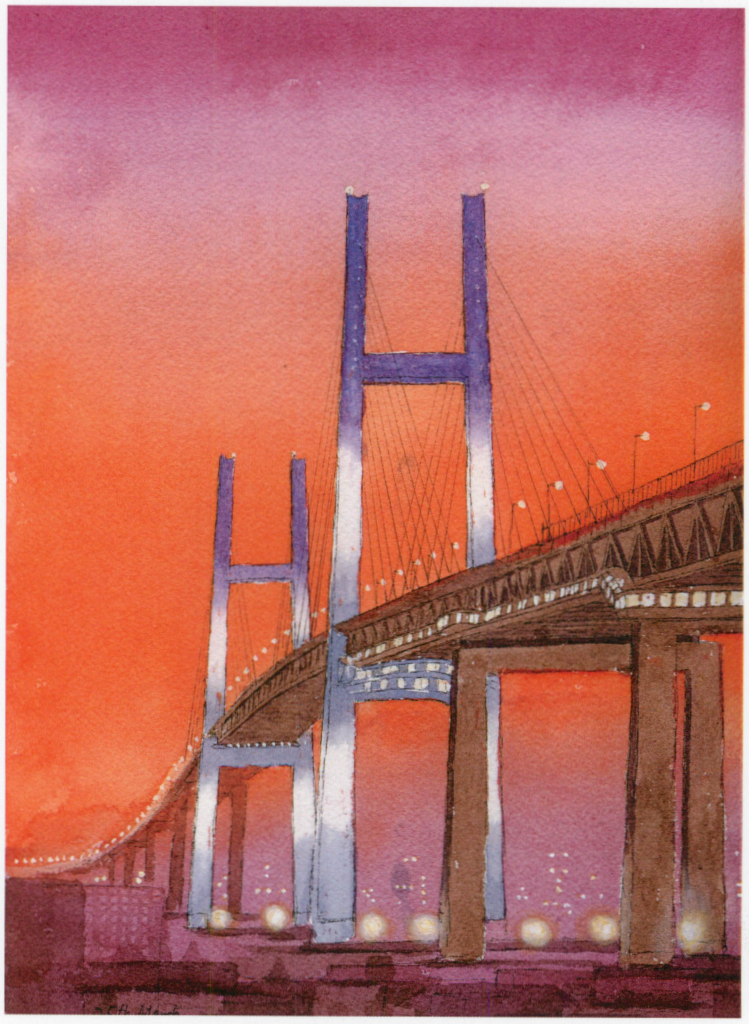
「えの木てい」1927年関東大震災外交人向け復興賃貸住宅、今はケーキ屋さん

「山手 111 番館」1926年 J.H. モーガン設計。スパニッシュスタイルの壁が美しい

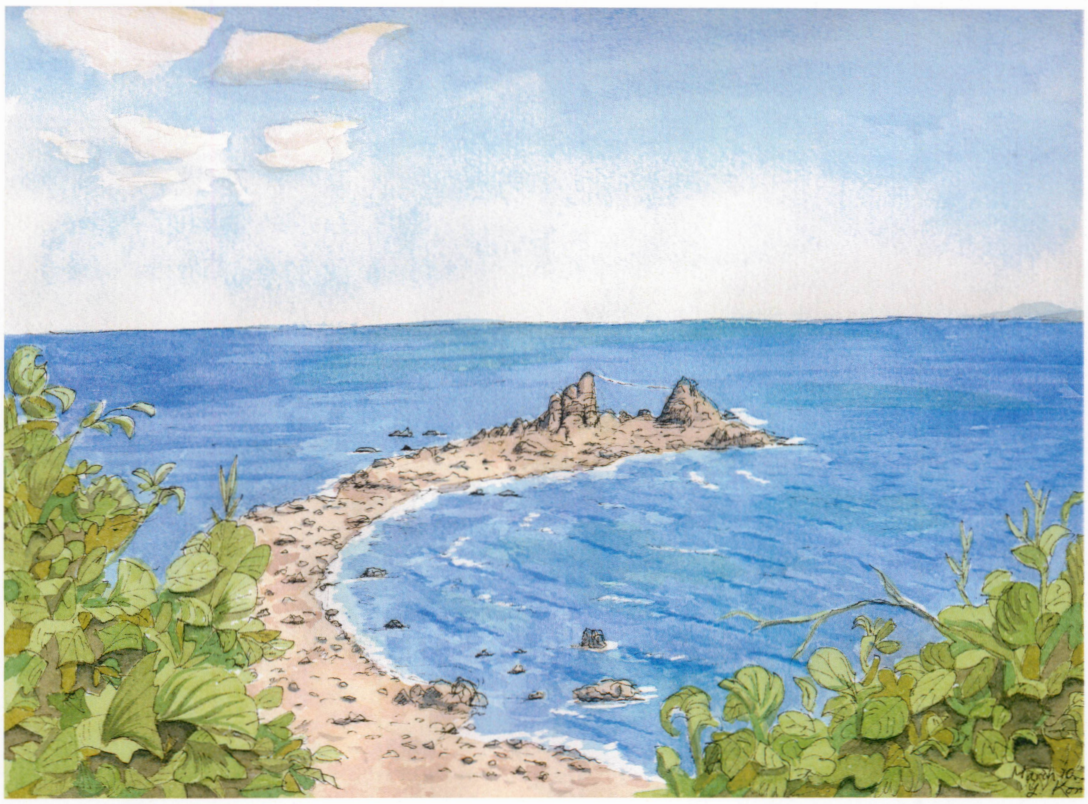
「ベーリック・ホール」1930 年建築。外国人住宅の中で最大規模のもの

絹糸貿易商「エリスマン邸」。A. レーモンド設計、軒の水平線が強調される

2002年復興オープンした「赤レンガ倉庫」。ひな人形のように並んだ2艘のタグボート、空と海と倉庫が背景として似た色調になるよう描いた



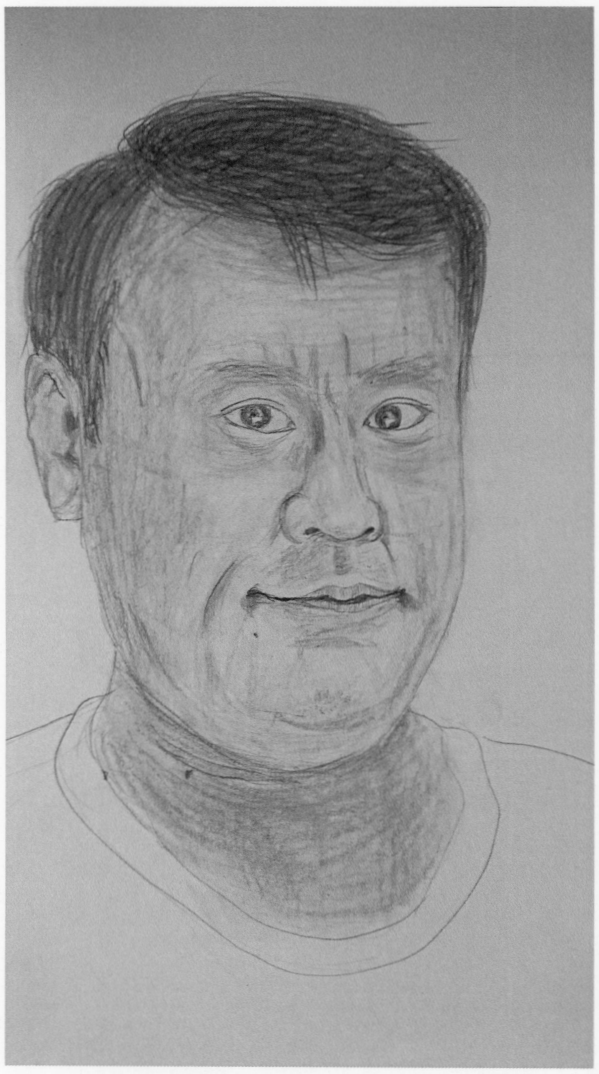
横浜ベイブリッジ

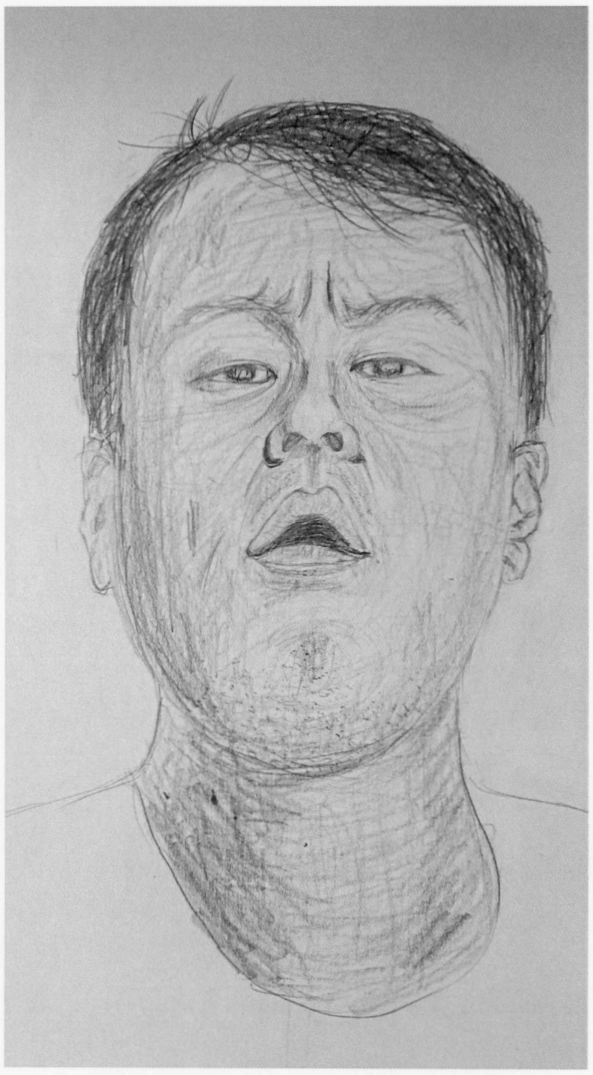


真鶴埼。真夏の強烈な光の降り注ぐ中、斜面を降りて先端まで歩いていった

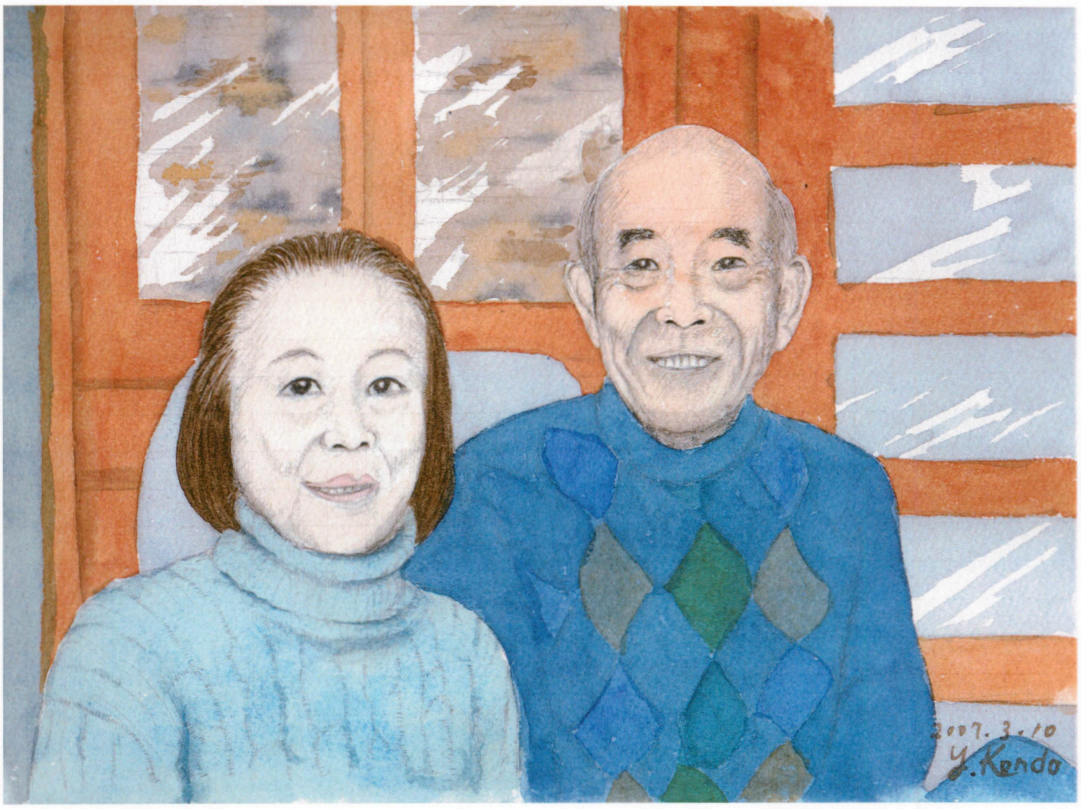
箱根旧街道。妻とハイキング、茶店の中は暗いが小さな裸電球があたりを照らす

家　族





自画像



両親の肖像画

1981年に佐賀県の官舎で撮った家族の写真を描く

愛犬ルーリード・鉄心。長男裕介の犬で、家族と共に15年間過ごす。
長男赴任先ジャカルタにお伴して彼の地で亡くなる

2002年秋、妻と箱根旧街道をハイキング。
石畳に木漏れ日のまだらな光があたっていた

義江の肖像画

長男の肖像画
（20歳の時、バンドに夢中）

次男の肖像画
（高３の頃、わざと変な顔をして笑わせようとしている）

突然の別れから早６年、今年は主人の七回忌を迎えます。

生後百日目のお食い初めの箸を執って、わずか１週間後に別れを告げられた末孫がおじいちゃんのことを覚えているはずはありませんが、４月に小学１年生となりました。

今でも主人の書斎はそのままですが、ある日書棚を整理していると、自分が描いた絵をポストカードに印刷したアルバムを見つけました。それぞれのはがきの裏にはコメントがあり、自分では画集など出せずに眺めていたのかしら……と、控えめな主人の一面を見た思いでした。

そしてこの度、義母の句集「和敬」と母の「菊池成子画集」を編集してくださった喜怒哀楽書房さんにこの画集を依頼した次第です。

当時は片翼をもぎ取られたような思いで必死に羽ばたいておりましたが、コロナ禍で往来もままならぬ中、たくさんの方のお支えや励ましにより今日を迎えられましたこと、有難く感謝申し上げます。拙宅にお参りにお越しくださった方々、ご遠方より菩提寺とお墓参りをしてくださった方々、毎年祥月命日にお花をお送りくださった方々。いつまでも近藤善弘を忘れずにお心にかけていただき声をかけてくださる方々、主人も喜んでいることと思います。ありがとうございます。

また私にとっては両親から受け継いだ菩提寺のお務めと、いつもご指導をいただいているご住職様とそのご縁の方々、茶道を通してご縁をいただいている方々や友人たち。主人の忘れ形見となった息子二人とその家族、孫たちからは、生きる勇気と希望を与えていただきました。主人からご縁を頂いたすべての方と両方の両親に心から感謝を捧げ、七回忌の供養とさせていただきます。

こんな形にしたことを、主人ははにかんで怒っているかもしれませんが、ご笑覧いただければ幸甚に存じます。

末筆ではございますが、皆様のご健康とお幸せを祈りつつ、また近藤善弘のことも少しは思い出していただければ嬉しくこの画集を送らせていただきます。

2024年７月21日　　近藤 義江

主人の眠る墓地の隣に西行庵があります。
その庭には古より日本に咲く四季咲きの
ミステリーローズが楚々と咲いています

「港の見える丘公園」のバラ

お父さんからは、色々と受け取ったと思っています。お父さんの優しさ、笑顔、パートナーに対する慈しみ。亡くなってからは、お父さんのいいところのエッセンス、こんなところは俺もちょっとだけ受け継げてるかも！と生活の中で、思いながら日々過ごしています。

お父さんとお母さんはすごいオシドリ夫婦だったけど、自分はパートナーと合わず離婚しました。生前に相談できたらな、と今でも思います。

お父さんから受け継いだ・貰ったものでは、一番大きいのは、音楽です。中学生のときに、個人的にバチバチって音楽に身を打たれたその最中、ギターを買ってもらい、さらに家にあったビートルズのLPを聴いて、こんな昔の奴らがこんなかっちょいー音楽やってたんだ！ってすごい衝撃でした！初めてコピー以外のをやった時は、友達とビートルズの曲をFunkアレンジでやりました。その後もバンドでオリジナルやってリリースできたり、社会人になってからはDJやったり阿波踊りの太鼓やったり、お父さんの子供だったから、今色々と人生楽しめているのかもな、と思っています、本当にありがとう！

長男　近藤 裕介

父は、とにかく謙虚な人でした。

すごい仕事をたくさんしてきたと思いますが、僕ら息子たちには一度も自分のことを自慢したことがありませんでした。

むしろ、公務員試験に受かったのもビリの方だし、自分なんかが出世できたのは、周りの人が支えてくれたからだ、転勤する先々で素敵な人たちとの縁に恵まれたからだと、いつも言っていました。

父からもらった１番のプレゼントは、成人式の記念品です。

表紙に高校時代の僕の似顔絵を描いてくれ、中には将来の僕に向けた８通の手紙が綴られています。

小さい頃ケガするたびに母が心配して泣いていたことから始まり、学生時代の友達の大切さや、将来の仕事についてなど。

当時かなり仕事が忙しかったはずなのに、よくこんなの作ってくれたなぁと、今でも読み返しています。

なかでも５通目の、「おかあさんについて」という手紙では、

恋愛経験が少なく逆説的かもしれないが、自分の人生の一番の成功は、おかあさんと結婚できたことだと思っている、と書いてあります。

結婚して３人の子どもに恵まれた今、20歳で読んだ時とは違った受け止め方があり、妻や子供たち、母と仲良く過ごせているのもこの手紙のおかげだなぁと思います。

僕は、父の死をきっかけに独立開業しました。

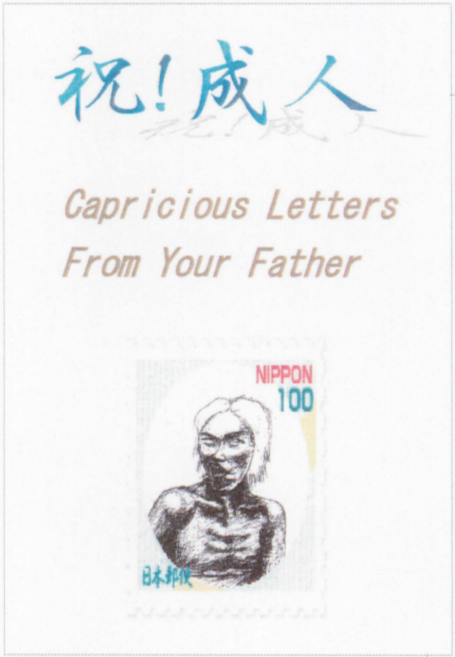
遺品整理をしていたら、父の手書きで法律事務所名の候補を列挙したメモが出てきて、その1つに「漣（さざなみ）法律事務所」と書いてありました。

事案が荒れた大波となる前に迅速に解決しなさい、事案の大小を問わず誠実に対応しなさい、そう父から言われているようで、この名前をいただきました。

父の仕事のモットーは、誠（誠実に）、筋（筋を通して）、尊（相手を尊び）、楽（自分も楽しみ）、謙（つつしみ深く）でした。

僕もこの精神を継承し、日々の仕事に精進しています。

次男　近藤 陽介



letter　5　**おかあさんについて**

私は、大学１年生の時におまえのおかあさんと知り合い、警察庁に入庁する直前の昭和５３年３月１８日に結婚した。結婚するまでに２００回以上デートした。恋愛の体験も少なく、女性で苦労した経験もあまりないので、おまえに女性や恋愛について語る資格はあまりないかもしれない。しかし、やや滑稽に聞こえるかもしれないが、私の人生において最も成功だったのは、おかあさんと結婚したことがと思っている。結婚は、人生最大の決断といってよいものだ。何事でも、やり直しがきかないことはないが、おそらく、やり直しが最もたいへんなことだろう。なぜなら、当人達だけではなく、生まれてくる子供たちまで巻き添えにすることになるからだ。

どんな美人や、セクシーな女性でもやはり、結婚して毎日見ていると感動がなくなるものであり、やはり男でも女でも姿より心だ。なによりも、性格のよい女性と結婚すると男性は幸せになれる。ああ見えても、おかあさんは、意外と優しいところがある。中学校３年生の時に父親を亡くして下井草のおばあちゃんが働くこととなったので、それ以来２人の弟の面倒をずっとみてきた。だから、デートをしてもいつも夕方になると弟たちにの食事を用意するために家に帰らなければならなかった。おとうさんは、デートしたときはいつも一緒に帰宅してついでに食事もごちそうになっていた。

おまえはおかあさんとよくけんかをするから、どう思っているか知らないが、おまえが生まれてからおまえのことをほんとうに自分の命よりも大切に思って生きてきたのはやはりおかあさんだ。私は育児はまったくお母さん任せで、今思えば反省もしている。だから、これからの人生でお母さんだけは大切にしてほしい。お父さんは、おかあさんから「のんきなとうさん」と思われているが、おまえを最も強くしかったのは、おまえがおかあさんをないがしろにした時だ。いろいろ言うおかあさんだが、これからはなるべくおまえのためを思って言っているのだと広い心をもって耳を傾けてほしい。おとうさんは、今でも自分には出来過ぎた女房をもらったと思っている。

結婚しようかどうか迷ったならば、相手の女性が、自分の血のつながった子供の母親になるのにふさわしいかどうかを逆転してイメージしてみることを勧める。いずれは誰かと結婚し、子供もできることとなろうが、親子の関係は、人が生まれたときからずっとありつづけることであるから、わかりやすい。だから、自分にも息子ができたとして、その母でいて欲しいような人もイメージしやすいわけであり、そういう目で女性を見ることもあながち無用ではあるまい。

近藤善弘略歴

1953年7月20日　父喜三郎、母利子の長男として京都に誕生
1966年　京都市立下鴨小学校を卒業し、洛星中学・高校にて柔道部所属
1973年　東京大学法学部入学、山登りサークルICSで義江と出会う
1978年　3月結婚・4月警察庁入庁　7月京都府警勤務（五条署にてバンド結成）
1979年　4月警察庁本庁勤務　6月長男裕介誕生
1981年　5月次男陽介誕生　　8月佐賀県警察本部警備第一課長
1983年　1月沖縄県警察本部捜査第二課長
1984年　短期在外研修、米国ワシントンDCとサンフランシスコに家族で滞在
1985年　滋賀県警察本部警務部長
1987年　警視庁目黒警察署長→警察庁本部勤務
1990年　警視庁捜査第四課長→警察庁暴対一課勤務
1994年　埼玉県警察本部刑事部長
1995年　通産省中南米室長
1997年　警察大学校刑事教養部長→警察庁暴対二課長
1999年　三重県警察本部長
2001年　神奈川県警察本部警務部長
2003年　警察庁生活環境課長→生活安全企画課長
2005年　宮城県警察本部長
2006年　国土交通省大臣官房審議官
2007年　警察庁長官官房審議官
2009年　皇宮警察本部長
2011年　定年退職して故郷京都へ移住→（株）イオンディライトセキュリティ社長
洛星中学・高校理事、菩提寺住本寺総代、京都社会事業団評議員、日赤下鴨分団長
日本国際警察協会京都支部相談役、バンド「ノリキーズ」（五条警察署バンドメンバーによる）ベース担当
2018年7月21日　自宅にて死去
2019年3月　叙位「従四位」・叙勲「瑞寶中綬章」拝受

近藤善弘画集

発行日　令和6年7月20日

発行者　近藤義江
〒606-0802
京都市左京区下鴨宮崎町165番地

制作・印刷　喜怒哀楽書房
〒950-0801　新潟市東区津島屋7-29
電話 025-250-9666

万一、落丁・乱丁などお気付きの点がございましたら当社宛にお知らせ下さい。